

発掘調査の概要

高松塚古墳の調査(飛鳥藤原第137次)

- 発掘された地震痕跡 -

平成16年10月に開始した今回の調査も3月末日をもって調査を終了となりました。調査は墳丘保護のために建設した仮設覆屋の内部と、丘陵の開削状況調べるため設定した未指定地(墳丘北側・西側)の調査区に分けて実施しました。覆屋は雨や風を防いでくれる反面、写真撮影の際に影むらが生じたり支柱が邪魔になるなど多くの苦勞を伴いました。

地震によるひび割れは現地説明会後の断割調査時に見つかりました。上部から竹の根が入り込んでいたため、当初はただの根穴であろうと判断しましたが、詳細に観察したところ部分的に版築のズレを確認でき、地震痕跡の可能性が浮上しました。ズレは大きいところで2～3cmほどあり、これらは昨今世間の話題になっている南海・東南海地震によるものと考えられます。地震の規模はおおよそマグニチュード8.0～8.6で、このような地震は約90年～150年周期で定期的に発生するといわれています。今回見つ



断割トレンチ西壁に見える地震痕跡

った地震痕跡がいつ頃の地震によるものかはさだかではありませんが、今回の調査区内でも20ヵ所以上で確認され、墳丘は相当損傷を受けていると推定されます。また、今回の調査により以前の調査でみつかった墓道部の溝状遺構(土層の陥没部分)も地震による断層の可能性が高まりました。こういった地震による断層や地滑りは、奈良県下では天理市の黒塚古墳や明日香村の酒船石遺跡などにもみることができ、これらはこの地域を繰り返し襲った南海・東南海地震によるものと考えられています。

2月27日には現地説明会が開催されました。当日は春の陽気を感じさせる快晴となり、全国各地からおよそ2000人を超える考古学ファンが現地を訪れ、調査員の説明に耳を傾けました。説明会は橿原考古学研究所や明日香村の協力もあり、大きな混乱もなく無事終わることができました。説明終了後には熱心に調査員に質問する方々も多く見られ、改めて高松塚古墳に対する世間の関心の高さが窺われました。高松塚古墳をめぐるのは、現在、新聞各紙で取り上げられているように国宝である極彩色壁画の恒久保存対策に向けた検討会がおこなわれています。保存科学や生物、修復などのあらゆる方面の専門家が最善の方策を検討しており、保存方針の決定の行方が注目されます。

今回の発掘調査により、古墳をとりまく環境や墳丘の規模を明らかにすることができました。この調査成果が今後の墳丘の再整備や壁画保存対策の重要な基礎資料となるでしょう。国民の宝である明日香美人のほほえみを後世に残すことが私たちに課せられた責務といえるでしょう。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 渡部 圭一郎)



現地説明会風景